

架け橋期の教育に関する 認識の共有を目指して

～ 全ての大人が立場の違いを越えて～



5歳児と小学校1年生の2年間が
「架け橋期」

架け橋期の鍵は、
「遊びを通して学ぶこと」
「具体的な体験や活動を通して学ぶこと」



架け橋期の教育の充実を図るためには、

子どもに関わる全ての大人が**立場の違いを越えて**連携・協働することが必要です。
しかし、「遊びを通して学ぶ」「具体的な体験や活動を通して学ぶ」という架け橋期の教育の特性が、
社会全体に認識されておらず、誤解されている現状があります。

そこで、本リーフレットでは、架け橋期の教育について**広く認識の共有を図る**ために、
幼稚園・こども園・保育所、小学校、保護者、行政が立場の違いを越えて、
それぞれの立場でできる取組についてまとめました。

御覧になっていただき、**子どもが本来もっている力を最大限に発揮**できるように、
それぞれができることを一緒に考えていきましょう。

「架け橋期の子どもって最高におもしろい！」

子どもに関わる全ての大人が、そんなふうに思える社会にしませんか。

架け橋期の子どもたち!

小学校には、
知っている先生が
いるんだよ!

先生～、
明日、保育園にランドセル
しょってきてもいい?

ぼく、かけっこ得意!
広い校庭で思いっきり
走るのって気持ちいい!

えみ先生の名前、
私と同じだから好き!

お兄ちゃん、お姉ちゃんと
一緒に学校に行けるのが
楽しみ♪

筆箱買ったんだ～。
早く鉛筆を使って
字を書きたいな♪

給食のおかずも
自分で配れるよ!みんなと
一緒に食べると美味しい♪

学校の中
探検できるんだって!
生活科って楽しい!

それぞれの立場でできること ～調査研究を通して～



保育園長

私たち管理職が連携の窓口となり、交流の場を計画的に
作っていくようにしなければならないですね。

管理職同士でのつながりも大変重要で、困ったときに、いつでも連絡
し合えたり、気軽に行き来できたりする関係を構築することが大切です。



こども園保育教諭

全ての園で幼児教育の質を高め、子どもたちの学びの姿を
分かりやすく正確に、自信をもって小学校に伝えていくことが必要ですね。

どの先生が1年生を担当しても、幼児教育とのつながりを理解して活動し、
子どもたちの興味や得意なことを生かしていくことが大切です。



保護者

「架け橋期」という言葉の認知度を上げていくことが重要です。
知っていることが当たり前になり、子育ての常識になることを願っています。

架け橋期の教育の認識の共有を深化・拡充していくには、教育委員会が
主導的な役割を發揮することが不可欠だと再認識しました。
つなぎ役が必要ですね。



小学校長



小学校教諭



行政

架け橋期の教育の充実

～子どもに関わる全ての人のウェルビーイングのために～

栃木県幼児教育センター顧問 大豆生田 啓友

栃木県では、架け橋期の教育の充実に向けた取組がとても進んでいること、うれしく思います。

先日、令和6年度栃木県教育研究発表大会の幼小連携部会で、「園長・校長のリーダーシップがつなぐ架け橋期の子どもたち」と題した実践発表を聞くことができました。園長・校長がペアになって、交流から、さらにそれぞれの取組を新たにしていく2組の実践は素晴らしいものでした。子どもを真ん中にした取組は、単に子どものウェルビーイング(幸せな状態にあること)につながることに加え、保育者・教師のウェルビーイングにつながるがよく分かる実践でした。おそらくそれは、保護者や、地域のウェルビーイングにもつながっていくことでしょう。その原点は、「こども基本法」にも示されている方向性「子どもの声を聴く」ことなのです。保育でも、授業でも、一人一人の「あなたは どうしたい？」が大切にされるかどうかカギとなります。



私は、いま全国で、往還型研修を行っています。保育者も、教師もみんなが「子どもの声を聴く」ことから始める実践が広がっています。それは、幼稚園もこども園も保育所も小学校も共通なのです。ある自治体では、小学校長も研修を受講し、学校に贈られた大谷選手のグローブを使ってキャッチボールをしたいという子どもの提案を受けて、子どもと教師が共に参画してその使い方のルールを決める会議を作り、使えるようになったという取組を発表しました。多くの学校で大谷選手のグローブがガラスケースの中にしまわれている中で、「子どもの声」が尊重される素晴らしい取組でした。

一方、多くの園で、今までの運動会等の行事を大人が一方向的に決めてしまうのではなく、子どもとのサークルタイムなどで決めていくといった取組が広がっています。それは、子ども自身が社会を作っていく担い手、エイジェンシーであることを実感できる取組です。

大人がすべて管理してしまうのではなく、子どもも一人の権利の主体者として尊重されることを通して、ウェルビーイングにつながるのです。架け橋はその大きな突破口となり、こうした取組が数年後には、どこの園・学校でも当たり前になることを願っています。架け橋期についての認識を共有することが、子どもも、保育者・教師も、保護者も、地域も、ワクワクが広がる持続可能な社会づくりの重要な核となるでしょう。

令和6(2024)年度幼児教育調査研究委員会(敬称略)

【委員】

あゆみ保育園	園長	加藤 英子
那珂川町立ひばり認定こども園	保育教諭	高瀬 弘
栃木市立国府北小学校	校長	金敷美由紀
高根沢町立阿久津小学校	教諭	荒井美貴子
宇都宮地区幼稚園PTA連合会	前会長	遠藤 隆尚
那須町教育委員会こども未来課	指導主事	深沢 智美
(学校教育課指導主事兼務)		

【事務局】

栃木県教育委員会事務局義務教育課
栃木県総合教育センター幼児教育部
(栃木県幼児教育センター)



令和7年3月発行